

活動報告

「学生が変える日本大学」第5章 —「日本大学 学生FD CHAmmiT 2018」における取り組み—

海浮裕太*^{1). 2)}, 松永直樹^{1). 3)}, 坂上亮介^{1). 4)}, 長谷川萌子^{1). 5)}, 磯部耕志郎^{1). 6)}
西村美穂^{1). 7)}, 田澤翔生^{1). 8)}, 新井せなみ^{1). 9)}

¹⁾「日本大学 学生FD CHAmmiT 2018」学生スタッフ, ²⁾日本大学文理学部心理学科3年,

³⁾日本大学法学部政治経済学科4年, ⁴⁾日本大学国際関係学部国際教養学科4年,

⁵⁾日本大学工学部生命応用化学科4年, ⁶⁾日本大学危機管理学部危機管理学科2年, ⁷⁾日本大学芸術学部文芸学科2年,

⁸⁾日本大学生産工学部応用分子化学科2年, ⁹⁾日本大学生物資源科学部生命化学科1年

本稿は、日本大学における「日本大学 学生FD CHAmmiT 2018」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果から、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べたものである。「日本大学 学生FD CHAmmiT」は、一般的な学生FDイベントと異なり、様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学だからこそ、その効果を大いに享受できる“日本大学独自の学生FDサミット”と言える。第1回目「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」から今回で6回目を迎えた。本活動報告が今後の日本大学の「学生FD活動」の更なる発展に寄与することを期待する。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「日本大学 学生FD CHAmmiT 2018」

はじめに

日本大学 学生FD CHAmmiT」(以下、「CHAmmiT」とする)とは、簡単に言えば、「学生FDサミット」の「日本大学版」であると言えるが、少し毛色が異なる。「学生FDサミット」とは十分な知識を持つ参加者など全国の各大学が一大学に集合し、大学教育について話し合い、学生FD活動を推進するための情報を交換する場でもある。一方で「CHAmmiT」とはチャットとサミットを掛け合わせた造語であり、難しく堅苦しい印象のあるFDと教育改善を教員・職員・学生で気軽に話し合おうというコンセプトが包括されている。今回で6回目を迎える「日本大学 学生FD CHAmmiT 2018」(以下、「CHAmmiT 2018」とする)は過去5回の中で最多の238名の参加者(スタッフを除く)を記録した。今回の「CHAmmiT 2018」ではこれまでの5回を踏まえ、さらに発展した企画を目指し開催した。

1 「CHAmmiT 2018」開催までの流れ

本節では、「CHAmmiT 2018」当日及び開催に至るまでの概要について、実施報告を述べる。平成30年

*E-mail: yachiore@gmail.com

投稿：2019年1月31日 受理：2019年2月20日

4月中旬から5月中旬に学生コアスタッフ8名が公募により選出され、6月下旬から活動を開始した。また、学生コアスタッフは、同時期に公募により選出または推薦された学生スタッフ29名と6月下旬に顔合わせを行い、10月中旬から本格的に協働し、企画・運営の準備を進めていった。10月中旬からは、文理学部・生産工学部学生FDワーキンググループのスタッフからファシリテーターとして12名が加わり、総勢45名で「CHAmmiT 2018」をつくりあげた。ファシリテーターとは、気軽な雰囲気、「しゃべり場」を円滑に運営するために、司会やタイムキーパー、ムードメーカーなどを1人で担う重要かつ難しい役割である。ちなみに「しゃべり場」とは、予め設定された教育改善にまつわるテーマについて、学生、教員、職員が1つのテーブルで気軽に話し合うことである。「CHAmmiT 2018」直前からの参加ではファシリテーターの練習が十分に行えない為、学生FD団体がある学部からファシリテーターの経験者を募った。今回の学生コアスタッフは、8名中4名が前回の学生スタッフまたは学生コアスタッフであったので、今までとは違う新しい「CHAmmiT」を作り上げることができたと考える。「CHAmmiT 2018」は、前回問題となった学生コアスタッフと学生スタッフ間の温度差や、企画の内容を踏まえて、「CHAmmiT 2017」のミーティング回数より1回増やすことになった。前回の「CHAmmiT」では学生コアスタッフミーティングを多数重ね、企画を決定したのち、学生スタッフと再び合流し企画の準備、練習を行っていた。しかし、学生FD、CHAmmiTの意義、企画内容のすり合わせを行う時間が十分に取れなかったため、教職員と協議し、10月上旬に追加でミーティングを開催した。このように、対応して頂いた職員の方々には大変感謝している。

1-1 第1回学生スタッフミーティング（平成30年6月23日）

全スタッフが集まり、初めての顔合わせとなった第1回学生スタッフミーティングでは、自己紹介を兼ねたアイスブレイクの後、「CHAmmiT 2018」に向けた趣旨説明に加え、基本的な事前知識の説明を行った。FD活動や「CHAmmiT」についての説明は、前年度コアスタッフの学生と職員が行った。概要の全体共有を終えた後、全スタッフで実際にしゃべり場を体験した。初めて経験するスタッフも多い中、積極的に意見交換をしている様子を垣間見ることができた。しゃべり場を通して、学生スタッフの交流を活発に行うことができ、教職員スタッフとのコミュニケーションの場にもなった。また、ファシリテーターの役割や「CHAmmiT」の概要について前年度コアスタッフ、学生スタッフから説明があった。続いて、コアスタッフ内で「CHAmmiT 2018」における代表を決定した。その他役割の決定は行わなかった。最後にコアスタッフは、一言ずつ決意表明を行い、期待に胸を躍らせながら第1回学生スタッフミーティングは終了した。

1-2 第1回学生コアスタッフミーティング（平成30年7月7日）

第1回学生コアスタッフミーティングは、当日の会場である日本大学芸術学部江古田キャンパスで行った。以後のスケジュールについての確認を行い、使用予定の会場を見学した。始めに「CHAmmiT 2018」を通して、参加者に何を欲得するか、どのように欲得したいのか、コアスタッフ8名で話し合った。話が進んでいくにつれ、理想の大学とは、学生にとって本当に必要とされる学びとは何なのかというところまで、行きついた。大変な作業ではあったが、コアスタッフ全員のCHAmmiTにかける想いを統一することができた。ここで3つの軸が出来上がった。①「立場、学部の違い、授業に対する意識の違いを通して気付きを得てもらう」＝ひとりでも多くの学生・教員・職員が日本大学での「マナビ」を共有し、お互いを知り合うことで、自分なりの「マナビ」を見つけられるようにする。②「今一度何のために学ぶのかを考えてもらい、マナビに対しての目的意識をもってもらう」＝“何を欲得、どうなりたいのか（夢や目標、理想の人物像）”を考えるきっかけを作り、学生が能動的に学修できるようにする。③「帰属意識・愛校心の育成」＝「日本大学の一員であること」に卒業しても誇りを持てるようにする。以後の企画内容の検討、決定は全てこの軸に沿って行われた。

また、「七夕企画」として、学務課職員の方から「日本大学のFDについて」の指導を賜り、次にしゃべり場形式で3つのテーマ（・コアスタッフとは・チーム力とは・コアスタッフを筆頭にチームで動いていくためには）について話し合った。この3つのテーマを議論することにより、今回の学生スタッフ全員が1つのチームとして活動をしていくために、コアスタッフ一同「何をすべきか」がより明確になった。

1-3 第2回学生コアスタッフミーティング（平成30年8月1日）

第2回学生コアスタッフミーティングは日本大学会館で行われた。前回決定した3つの軸を基に企画骨子案の検討と、芸術学部らしさを出す仕掛けの検討、すり合わせをメインに行った。企画骨子案の検討では、授業案を事前に作り、当日教職員・学生に向けて講義を行い実際に評価してもらう、実際に参加者で授業案を作り、正式に開講させるなどユニークな意見がたくさん出た。そしてポスターに載せるキャッチコピーの選定を行い、ポスター作成者も決定した。また芸術学部らしさを引き出す仕掛けの検討にあたっては、芸術学部から奥野邦利教授が出向いて下さり、親身に私達のアイデアを聞いて下さった。私達の様々なアイデアを芸術学部関係者の方々に伝えて下さるなど、多大なご尽力を頂いた。そして、リーダーを除く学生コアスタッフ7名の役割を振り分けた。

「オープニング・エンディング班」2名

「企画立案・運営班」2名

「広報・資料班」3名

以後、学生スタッフを上記の班に分担し、コアスタッフは各班のリーダーの役割を担った。

1-4 学生コアスタッフ企画検討合宿（平成30年8月23日・24日）

日本大学軽井沢研修所にて、学生コアスタッフ企画検討合宿を行った。企画骨子案として様々なアイデアは出ていたが、決めかねている状態であった。そこで、コアスタッフ8名がそれぞれ企画内容を考え、全員の前で発表する形式を取った。学生コアスタッフ・教員スタッフ・職員スタッフの三者の立場から意見を聞くことができたので、三位一体の企画内容となった。また松戸歯学部河相安彦教授から「日本大学教育憲章」についてご説明して頂いた。その結果、第1回学生コアスタッフミーティングで決まった軸も加味し、「日本大学教育憲章」を取り扱うことに決定した。「日本大学教育憲章」とは本学の「目的及び使命」を理解し、本学の教育理念である「自主創造」を構成する「自ら学ぶ」、「自ら考える」及び「自ら道をひらく」能力を身につけ、「日本大学マインド」を有する者を育成する旨を明文化したものである。学生からすると、大学教育を通じ、自身がどのような成長ができるかを把握することができる。以下が合宿で決まった事項である。

◇キャッチコピー「日大に通う意義、そろそろ知りたくない？」

◇「日本大学教育憲章」をテーマにしゃべり場形式を行う

これらを柱として企画案の検討を行い、以下のようなタイムスケジュールを作成した。

・オープニング

参加者に1日を通して得て欲しいこと、「CHAmmiT」とは何か、など初めて「CHAmmiT」に参加する方々にもわかりやすい内容を意識した。緊張を解きほぐし、何か楽しそうだなと思ってもらう。

・アイスブレイク

学生・教員・職員が混在するグループを作り、日大にまつわるクイズを行い、話すことに慣れてもらう。

・しゃべり場①～③

①、②では学生・教員・職員が混在したグループでしゃべり場を行う。③では学部ごとに座ってもらい日本大学教育憲章の各能力を伸ばすためにできることを考えてもらう。学部ごとに設定した理由は、話し合っ

た内容を、今後の学生生活に活かしやすいようにするためだ。学部が違えばカリキュラム、環境などが異なり、学生自身が次のアクションに移るための参考になりづらいと考えた。

・エンディング

短く楽しいものにし、今日1日を振り返る。

・懇親会

参加者・スタッフ全体の親睦を深めてもらう。

1-5 第2回学生スタッフミーティング（平成30年10月6日）＜追加分＞

本ミーティングは、追加で開催したため、全メンバーが集まることはできなかったが、不参加者にはメールなどで対応し、企画に関して全員の理解とコンセンサスを図ることに努めた。第1回学生スタッフミーティングから時が大分経ったので、スタッフ間の緊張をほぐすためにも簡単なアイスブレイクを行った。その後今年度 CHAmiT を開催する目的、日本大学教育憲章について、企画に関して、コアスタッフから入念に説明を行った。疑問点、理解できない所があれば、すぐコアスタッフで対応した。また学生スタッフへ、各班のコアスタッフから役割分担の説明を行い、自分が入りたい班を次回の「ワールド・カフェ」の時までに決定するよう促した。ちなみに「ワールド・カフェ」とは、全学部共通の初年次教育科目として、建学の精神を授業名にした「自主創造の基礎」という授業の一環であり、約16,000人の1年生が文系、理系、医歯薬系の学問の垣根を越えて指定されたキャンパスに集まり、大学生が話しやすいようなテーマが設定され、気軽に話し合う授業のことだ。また、今年度の広報または集客の目標として、教職員併せて公募の枠60名を全て埋めることをチームの目標として立てた。ポスターを用いた広報、連動してTwitterの運用に力を入れ、学生スタッフ全員の協力が必要になることを説明した。参加者募集は9月28日から始まっていた。ミーティングを通じて、コアスタッフと学生スタッフ間で密にコミュニケーションを取れたことで、今後の団結力がより高まった。

1-6 ワールド・カフェに参加（平成30年10月14日）

ワールド・カフェ会場の一部である静岡県三島市にある国際関係学部にもバスで移動した。ワールド・カフェでは、「学び」をテーマとして約4時間（うち1時間昼食交流含む）のしゃべり場を行い、普段接する機会の少ない他学部の学生との交流から、「CHAmiT」に近い雰囲気でのしゃべり場を経験することができ、大変貴重な機会となった。大半の参加者が1年生であったため、程よい緊張感の中話すことができたことで、本番にファシリテーターとして議論を導く難しさを体験することができた。ワールド・カフェ終了後は、全員で集まり、ワールド・カフェの振り返りをグループで行った。コアスタッフで作成した振り返りシートを基に、おのおの自己分析を行い、その結果をグループ内で共有し合った。そして、学生スタッフの役割分担も行い、各班で仕事を進めていく体制が整った。

1-7 第3回学生スタッフミーティング（平成30年10月27日）

第3回学生スタッフミーティングは日本大学会館で行われた。参加者募集期間であったので、始めに広報の現状と今後の動きについての確認を全体で行った。ポスター広報では、各学部の教職員と写真を撮るための準備と流れの確認を行い、撮影が終了した学部からTwitterに学部紹介として写真を活用した。どの学部も快くお願いを受けて下さり、大変感謝している。Twitterではカウントダウン企画として、全スタッフのそれぞれの写真を投稿することを皆に伝えた。企画も具体的に固まったので、実際にデモンストレーションを行った。今年度取り扱った「日本大学教育憲章」は内容が難しかったため、学生スタッフ全員が「日本大学教育憲章」を十分に理解することを促すことが、何よりも大切であった。そのため、密に学生スタッフと

コアスタッフが意見交換し、必要があれば企画の修正も迅速に行った。その後各班で別れ、本番に向けて装飾や必要資料の準備を進めた。

1-8 第4回学生スタッフミーティング（平成30年11月17日）

第4回学生スタッフミーティングは当日の会場でもある芸術学部江古田キャンパスで行われた。主な活動は、企画に関して修正点の説明と、再びしゃべり場のデモンストレーションを行うことだった。申し込み段階の参加者数は予測を大きく上回る人数であり、本番も近づいてきたことも相まって皆表情は真剣そのものだった。当日、ファシリテーターがより円滑に役割を行うため、ファシリテーションマニュアルの読み込みもしっかり行い、全員で本番に備えた。特に企画の中心である「日本大学教育憲章」の内容を綿密に確認した。全スタッフで「CHAmiT 2018」の全体像を共有し、企画・資料の最終確認と調整を行い、全学生スタッフの前日の役割や、芸術学部の施設確認をした上で、学生スタッフの本番当日の動きを検討した。またオープニング、エンディング、懇親会は多くの芸術学部の教職員、学生の協力のもと華やかに行われる予定であり、入念にすり合わせを行った。打ち合わせを進めていく中で、芸術学部の教員の方々から叱咤激励を頂くこともあり、スタッフ一同より一層気を引き締めることができた。

1-9 前日リハーサル・設営準備（平成30年12月8日）

役割班別に設営する場所を決め、それにならって全スタッフで使用教室の設営、アイスブレイクやしゃべり場で使用する備品の設置を行った。オープニング、エンディング、懇親会班は当日の司会進行の練習と動きの確認を芸術学部の教職員の方々で行った。予定ではしゃべり場練習を想定していたが、時間の大幅な変更があったため練習が充分に行えなかったのが残念であった。しかし、事前のミーティングで練習していたため、本番に大きく支障をきたすことはなかった。

1-10 CHAmiT 2018 当日（平成30年12月9日）

当日学生スタッフは午前9時30分の受付開始に備え、全員午前9時に集合し点呼を行った。学生スタッフ（ファシリテーターも含む）の当日欠席は1名だった。補填として学生コアスタッフ1名が対応することとなった。午前9時に集合後、受付係は名簿などの確認を、オープニングに関わる者は諸々最終調整を、その他の学生スタッフは設営状況の確認を行った。今回も東京薬科大学の学生の方々がオブザーバーとして参加し、新たに明星大学からも参加を頂いた。本学の学生FD活動に興味を持っていただけたこと、また一日を通して交流できたことは本学の参加者にも学内だけでは感じる事ができなかった大きな「気づき」を得る機会となったであろう。そして当日も宮沢誠一教授、奥野邦利教授によって、照明や音響、機材等に関わる幅広い分野のサポートに入ってもらい、よりクオリティの高いものになった。

当日は以下のタイムスケジュールで行われた。

10:30～11:15 オープニングムービー上映・司会進行

オープニングではまず、芸術学部の奥野邦利教授の授業で受講している学生が製作したオープニングムービーの上映から始まり、マジック研究会によるマジック『The Greatest Showman』が披露され、幕開けとなった。その後日本大学副学長落合実教授からの開会の挨拶、続いて学生スタッフ代表海浮裕太からも同様に挨拶があった。そして「学生FD」、「CHAmiT」、「しゃべり場」の説明を司会の坂上亮介、長谷川萌子の掛け合い形式でなされた。今年度特徴的だったのが、芸術学部の川上央教授の計らいにより、CHAmiT マスコットキャラクターのフラワードッグ君のCGを作成して頂き、スクリーン上で喋れるようにして頂いた点だ。芸術学部ならではの仕掛けであったと思う。

その後「CHAmmit 2018」の企画説明を磯部耕史郎、田澤翔生の両名で行った。「CHAmmit 2018」を通して参加者が何を欲して欲しいかをしっかり伝えた。マナビに関して目的意識を持って欲しいという想いをわかりやすく伝えるため、「マナビルート」というキャッチフレーズを用いて説明した。「マナビルート」とはマナビを通じて、どのような目標を立て、目標を達成するために何が必要か、何をすべきかを考えてもらうためのフレームである。

11:25～11:55 自己紹介、教室単位のアイスブレイク（日大にまつわるクイズ）

アイスブレイクでは各グループで自己紹介と教室全体でクイズを行った。これは、しゃべり場①にリラックスして入ってもらうことが狙いであった。クイズの内容は総合大学として日大の特徴を尋ねるものであり、どの班にも教員、職員、学生がいたため、多様な意見が出て大変盛り上がった。グループのファシリテーターではなく、コアスタッフが教室全体のファシリテーターを担ったことが、盛り上がりの要因の1つであると考えられる。参加者がオープニング、アイスブレイクを行っている裏で、当日の欠席者の確認を職員の方が行い、全体に通知した。

11:55～12:25 昼食タイム

各教室で切りのいいところで昼食タイムに入った。そして芸術学部の星野裕教授のご厚意で設置して頂いた「Voice!POOL」に、参加者各々が学びに対する想いなどを記入したピンポン球を投げ込む時間を設けた。多くの参加者が実際に体験して、楽しんでもらえたので設置して良かったと感じた。

12:25～12:40 しゃべり場①ミニワーク

しゃべり場①に入りやすいように、学生生活を振り返る切り口としてミニワークを行った。「日本大学教育憲章ルーブリック」をもとにした『キミの強みは？能力診断チャート』（参考資料1）に記入するミニワーク形式であった。記入したチェック表や作成したレーダーチャートを見て、自分の特徴をグループ内で発表し、学生生活の振り返りを行った。個人ワークの『マナビルート』（参考資料2）に現状分析の書き込みをさせたので、しゃべり場③と体系的になっていることが参加者にもなんとなく伝わったと感じた。

12:40～13:30 しゃべり場①（学・教・職、学部混合）

テーマ「大学生が考える大学生に必要な能力」

一今の日大生（自分）に足りていない能力は？

形式：KJ法の適用としおりのメモ欄を使用

しゃべり場①では教員・職員・学生、学部混合の班を作り、最初から「大学生に足りていない能力とは何なのか」という切り口から入ると意見が出づらいため、普段の学生生活（授業、サークル、バイトなど）をもとに後悔したこと、失敗したこと、憧れなどを切り口に話し合ってもらい、付箋に記入してもらった。続いて付箋を分類分けしていき、それらをまとめた意見はどんな能力があれば解決できたかを考えてもらった。最終的にいくつか能力を『しゃべり場①セーブポイント』（参考資料3）に書きとめさせしゃべり場②に移動してもらった。移動の際少しもたついたが、ファシリテーターが上手く誘導してくれたため、時間通りに行えた。

13:40～14:10 しゃべり場②（学・教・職、学部混合）

テーマ「意見共有・他花受粉」

しゃべり場②ではしおりの座席表をもとに移動し、教員・職員・学生混合班で、しゃべり場①でまとまっ

た能力を共有してもらった。共有の方法は「ワールド・カフェ」の形式のように、各班にホストとなるファシリテーターを残し、他の班からきた参加者に自分の班での話し合いについて模造紙を見ながら共有した。他の学生には①で書き込んだ『しゃべり場①セーブポイント』（参考資料3）を見てもらいながら、ファシリテーターが誘導し発表を行わせた。最終的に学生の足りない能力（=必要な能力）を上位5つ決めてもらい、『しゃべり場②メモ広場』（参考資料5）に書き込ませ、大ホールに移動となった。多くの学生、教職員の意見に触れることができ、参加者に気づきを与えることはできたと思う。どの班も、必ず自分と違うグループの意見に触れられるように、しゃべり場②でのメンバー編成を工夫した。

14:30～14:50 「日本大学教育憲章」の説明（ネタバラシ）

大ホールに全グループが戻ってきたことを確認し、「日本大学教育憲章」の説明を代表の海浮裕太と学祖山田顕義に扮した松戸歯学部の河相安彦教授との掛け合い形式で行った。大ホールまでの移動には、休憩時間も含め20分間取っていたので、大きな乱れもなくスムーズにいったと感じた。「日本大学教育憲章」と8つ能力の説明がメインであり、参加者に理解して頂けるか不安であったが、アンケート結果を見る限り、大半の方に理解して頂くことができた。

14:50～15:05 しゃべり場③ミニワーク

そのまましゃべり場③に入ってもらったが、しゃべり場①と②の振り返りがないと、「日本大学教育憲章」の8つの能力に関して整理がつかないと思い、再びミニワークを行った。しゃべり場②でまとめた『しゃべり場②メモ広場』（参考資料5）を見て、「学生に足りない能力」を発表してもらうことで、8つの能力と一致する点や相違する点をグループで話し合ってもらい、8つの能力に関してグループで理解を深めた。

15:05～16:05 しゃべり場③ 学生目線の8つの能力を伸ばすためにできること マナビルートの記入

机上に配布した『学生から見た8つの能力』（参考資料4）を参考に、各学部で能力を伸ばすために、何ができるか、どんな力、知識が必要かを考えてもらい、付箋に記入し模造紙に貼ってもらった。また、新たに学部で伸ばせる能力も考え、学部の特色も理解してもらうこともねらいとした。最終的に「日本大学教育憲章」をもとにした、『学生目線の8つの能力とできること』（参考資料6）を模造紙で作り上げた。その後しゃべり場①のミニワークで記入した現状のまとめを基に、個人の『マナビルート』（参考資料2）も考えてもらい、しおりに記入してもらった。しおりに記入させたねらいとして、各自持ち帰り、今後の学生生活にもぜひ繋げて欲しいという私たちの想いがあった。

16:05～18:00 全体発表、エンディング、懇親会実施

しゃべり場③で作ったプロダクトを3グループほど有志で全体に共有してもらった。学部ごとで意見に特色が出ていたので、作成されたプロダクトについては第2節で分析を行う。また、「CHAmiT 2018」の1日を通して得られた「気づき」から、今後の大学生活がまた少し違ったものになってくれることを願うばかりだ。

エンディングではまず、Google フォームを利用したアンケートを行った。参加者はQRコードから事前に用意したGoogle フォームにアクセスし、アンケートに回答した。アンケート実施後、参加者から感想を述べる時間を設けた。その後、全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダー・松戸歯学部の河相安彦教授、芸術学部長の木村政司教授より講評を頂き、学生スタッフ代表海浮裕太が閉会の挨拶を行った。そして記念撮影を行い「CHAmiT 2018」は閉会した。懇親会では1日を通して撮影した写真を芸術学部の川上央教授に動画として編集いただき、その動画を流し、参加者全員で「CHAmiT 2018」を振り返った。

当日は学生・教職員スタッフ及び参加者の協力のもと大過なく閉幕することができた。

1-11 事前準備から当日までの反省点

ミーティング全体を通して大変だった点として、指揮系統の不明瞭さが指摘できる。今回の CHAmmiT は今まで以上に大きな規模で実施したが、その分多方面の方に協力を仰ぐこととなった。コアスタッフは8名しかおらず、物理的に厳しい状態が続き、多くの場面で職員の方々の助けを借りることとなった。その結果職員の方を介した連絡が増えてしまい、誰がいつまでに何をするのが曖昧になり、情報が錯綜することもあった。芸術学部らしさを演出したいという思いから、学生スタッフの人数を加味せず、様々なお願いをしてしまったことが原因であろう。今後は自分たちのやりたいという思いだけではなく、実際に実現可能かという視点も持つことも大切である。

2 参加者の制作物の分析

本節では「CHAmmiT 2018」の参加者の制作物であるしゃべり場③で行った『学生目線の8つの能力とできること』（参考資料6）の中の「学生生活でこの能力を伸ばすには」の分析をする。学部別のそれぞれの班で作成された模造紙には下記のような特徴があった。まず始めに各学部で作成された模造紙を8つの能力別にまとめ、出された意見を内容別にカテゴリ化し、表にまとめた結果が以下になる。

能力	出た意見	数
豊かな知識・教養に基づく高い倫理観	色んな人と関わり自分の価値観を広げる	14
	一般教養科目を取る	6
世界の現状を理解し、説明する力	異文化交流	41
	ニュース、新聞などを見る	28
論理的・批判的思考力	批判的に物事を見る、偏見を捨てる、疑う習慣を持つ	11
	レポート、卒業研究にしっかり取り組む	7
問題発見・解決力	固定観念、偏見を捨て疑う力を持つ	7
	卒業研究に取り組む	4
挑戦力	新しい環境に飛び込む、新しいことを始める	24
コミュニケーション力	多様な環境で、多様な立場の人とコミュニケーションを取る	40
リーダーシップ 協働力	責任のある役割を担う	10
	自身の強みを知る	7
省察力	他人からフィードバックをもらう	8
	記録に残し、後で振り返る	7

各能力で、意見の数が多かったカテゴリ上位2つを抜き出した。意見の数が多く、少ないなどと各能力で大きな差が見られる。また具体的な回答、少し抽象的な回答という違いも見受けられる。推測するに、同一の意見が多く、具体的な内容が多い能力は学生にとってイメージしやすいものであったと捉えることができる。反対に同一の意見が少なく、抽象的な内容が多い能力は学生にとってイメージしづらいものだったともいえる。

続いて学部で伸ばせる能力について見ていく。全学部さらに伸ばせる能力に関して、以下の表にまとめた。

学部でさらに伸ばせる能力（しゃべり場③プロダクトから抜粋）		
学部	能力名	詳細
法学部	リーガルマインド	政治家と知り合いになる 批判力・難解な文章を読む能力
文理学部	交友力	他学科の人と触れ合う・総合教育科目におけるグループワーク 文理チャミット・しゃべり場
経済学部	経済学的・経営学的思考	基礎理論科目（マイクロ経済学Ⅰ・Ⅱ、マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ、経営学、会計学）・パディー制度の利用による能力の向上 日大経済OBと関わり話を聞く
商学部	お金の使い方 「自己管理」	学生起業
芸術学部	創造力	成績を気にしない・成績ってナニ？・専門性の高さ 先生と学生の関係性が良い・夢を必ず持っている
	脱力	授業つめすぎない・木を抱く・単純作業を好きなだけやる 森、雪を見る・SNSから離れる・寝る・ご飯
	理想力	自分がすごいと思いつける・面倒くさいことを大切に・周りに流されない・恋するモチベーション・思い出を大切に・謙虚さ 好きなものを好きでいつづける努力をする
	恋愛力	先輩フィルタをかけてみる（クラブガイダンス） 作品を観る・夢中になる・背伸びしてみる
国際関係学部・短大三島	国際力	語学検定研修・言語の授業を増やす・提携留学先の増加 海外旅行・TOEIC・TOEFL
	発想力	学食の提案・プロジェクトM（地元の商品開発） ラジオサークル・国際交流研究会・学内での給食の検食会
スポーツ科学部・危機管理学部	統合力	柔軟な思考・広い視野を持つ・学んだ事を行動に移す
理工学部・短大船橋	自己表現力	学会での発表・話し伝える力
	倫理観	専門書を読む・礼儀の作法の授業をつくる 他学部や他学科の授業を受けてみる
生産工学部	俯瞰する力	生産工学系科目・生産実習・現役企業人の講義や指導
工学部	1人暮らしの生活力	自己管理
医学部	忍耐力	テスト・レポート・解剖
歯学部・薬学部	自己管理力	遅刻しない・お金の管理・実習道具をなくさない
松戸歯学部・薬学部	社会人基礎力	コミュカ・好奇心・分析力・語学力・学力
生物資源科学部	NUBS力	自身で育てたもので実験ができる・自分が好きなものを追求する 将来につながる授業・農場演習林加工センター農作業 自分の手を動かす大変さを知ることができる 学ぶための施設が充実・自然が多い
	すり合わせ力	先生との仲がいい・良い意味で適当 面白い先生が多い・教授との距離が近い
通信教育部	応用力	他学部の教養を身につけられる・メディア授業で人と顔を合わせずに意見交流ができる・多様な単位のととり方・動きながら学べる

どの学部も特徴的だが、芸術学部と生物資源学部は特にユニークであり、その学部の雰囲気を追体験していきような気分になれる。総合大学の日本大学ならではの面白さである。

3 参加者アンケート分析

本節では、本学における全ての学部等からスタッフを含め学生 166 名・教員 33 名・職員 33 名、計 232 名から回答いただいたアンケート結果をもとに「CHAmmiT 2018」について参加者の視点から考察する。

まず、以下の2つの質問から「FD」、「学生FD」の認知度について考察する。

1. 今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

CHAmmiT2017	はい		いいえ		回答なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
学生	51	33.0%	103	66.0%	1	1.0%
教職員	48	94.0%	3	5.9%	0	-
全体	99	48.0%	106	51.5%	1	0.5%

CHAmmiT2018	はい		いいえ		回答なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
学生	50	30.0%	114	69.0%	2	1.0%
教職員	63	95.5%	1	1.5%	2	3.0%
全体	113	48.7%	115	49.6%	4	1.7%

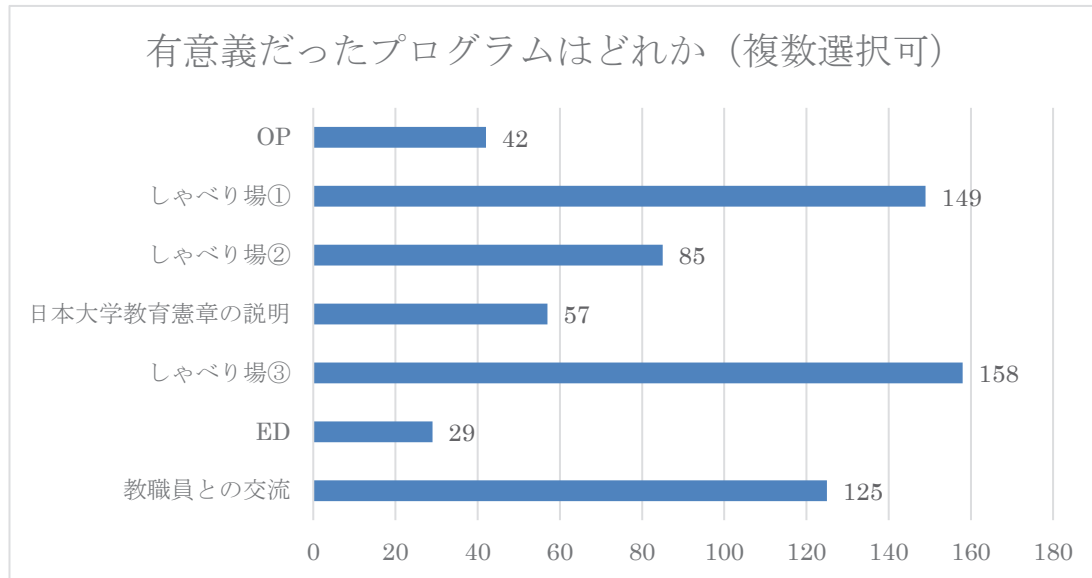
2. 今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

CHAmmiT2017	はい		いいえ		回答なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
学生	55	35.0%	100	65.0%	0	-
教職員	47	92.2%	4	7.8%	0	-
全体	102	49.5%	104	50.5%	0	-

CHAmmiT2018	はい		いいえ		回答なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
学生	54	33.0%	112	67.0%	0	-
教職員	59	89.4%	5	7.6%	2	3.0%
全体	113	49.0%	117	50.0%	2	1.0%

上表「FD」と「学生FD」の認知度について、去年のCHAmmiT アンケート結果と比較したものである。今回は「FD」の認知度、「学生FD」の認知度はほぼ変わらなかった。これは「CHAmmiT」開催によりある程度のところまで認知度はあがったものの、その後の伸びがなかったことを意味しており、従来の方法での宣伝ではまだ弱く、別の解決策を模索する必要がある。従来の宣伝で認知度が足りないのだとしたら、解決策の1つとして各学部学生FD団体を創設し、普段から活動することが最も効果的なのではないかと考える。

次に「CHAmmiT 2018」の企画について参加者の視点から考察する。



上記の結果をパーセンテージで整理すると、OP（18.1%）、シャベリ場①（64.2%）、シャベリ場②（36.6%）、日本大学教育憲章の説明（24.6%）、シャベリ場③（68.1%）、ED（12.5%）、教職員との交流（53.9%）になる。参加者が有意義だと感じるのは、シャベリ場の場面が多いので、今後も同様のプログラムを続けていくべきである。参加者の有意義さは話し合う内容よりも、教職員や他学部の学生と交流できることに相関しているように思われる。1日を通して時間はたくさんあったが、シャベリ場③のボリュームと時間のバランスがあまり取れていなかった。来年度は参加者に負担にならない時間編成を組むことが望ましい。

4 学生コアスタッフ「CHAmmiT 2018」を通して

本節では、学生コアスタッフ8名の視点から「CHAmmiT 2018」を通じて感じたこと、今後の展望について記す。

4-1 「CHAmmiT 2018 を終えて」 海浮 裕太

（日本大学文理学部心理学科3年 CHAmmiT 2018 学生コアスタッフ代表）

まず初めに「学生FD CHAmmiT」に携わって頂いた、多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げる。今年で6年目の開催となったわけだが、それは今まで積みあげてきてくれた、多くのCHAmmiT関係者の想いがあったからこそ、ここまで続いているのだと思う。もちろん今年協力して頂いた多くの学生、教員、職員の皆様にも同じ想いである。

そして、私がCHAmmiTを通じて学んだ事と今年度のチャミットにこめた想いを簡単にお伝えしたい。学んだ事として、学生FD活動は、学生・教員・職員の3者が協働し、同じベクトルを持つことで、初めて大学に「価値があるもの」として提供できるのだと再認識できたことだ。今年のCHAmmiTで言えば、「日本大学教育憲章」を取り扱うにあたって、この3者の視点が解釈のバランスを取る上で必須であった。やはり大学はこの3者で成り立っていて、どこかの立場の人が欠けてしまって、ないがしろにされると、目指す「理想の大学像」というものが偏ってしまうからであろう。

また文理学部の学生FD活動に携わっていて、活動を通じて疑問に思ったことを今年度 CHAmmit に反映させた。具体的には「マナビの目的意識」が、私も含め全ての立場の人に足りていないのではないかと感じていた。マナビを授かる学生、マナビを授ける教員、マナビを支える職員という構図はあるのだが、大学という枠の中で、機械的に作用しているだけのようにも見えていた。そこで「共通の目的意識」＝「なぜ私たちはそれを行うのか？」という指標があれば、少しでも今の状況が変わるはずだと思っていた。そんななか「日本大学教育憲章」について、松戸歯学部河相教授や職員の方からご教授頂いた。まさに点と点が繋がった気がして、ぜひ多くの人に知ってもらいたいと思い、今回の CHAmmit を作り上げた。アンケート結果から、大半の参加者には理解して頂けたが、参加者以外の人達にどう周知させていくかが今後の課題であろう。

最後に私達の今回の活動がきっかけとなり、学生FDがさらなる発展を遂げることを願っている。

4-2 「私とチャミット」 松永 直樹

(日本大学法学部政治経済学科4年・CHAmmit 2018 学生コアスタッフ 広報・総務担当)

私は今年3年目の CHAmmit スタッフとして参加した。以下はそれをまとめたレポートについて書いていく。

まず、6月スタッフ全員との顔合わせ。CHAmmit のスタッフは毎年違うため、ほとんどの方とは初対面となった。同じ学部の人もいればそうでない人もいる。これから半年の間一緒にやっていく仲間として交流を深めた。それからしばらくはコアスタッフのみでの集まりとなり、江古田での打ち合わせや軽井沢での合宿などを通して、構想を練っていくと同時に親睦を深めた。12月のイベントに向けてどのようにやったらいいのか、どうやったら学部間のわだかまりをなくすことができるのか、一生懸命考えた夏だった。そして、8月の末にはこれからFD活動を行っていくにあたっての理解を深めていくため、京都・京都光華女子大学で行なわれた、「学生FDサミット2018夏」に参加した。このサミットを通して、他大学の人との出会いがあった。この学生FDサミットでは他学部で CHAmmit をやっている仲間や教職員の方々と一緒に参加し、これから CHAmmit で使うことができるネタなどを吸収するということを目標にして頑張った。この学生FDサミットは、日本大学の CHAmmit とは一味違うものであったが、大変勉強になった。

それから、10月になり、再び CHAmmit に向けて全体で動き出した。いろいろなミーティングや国際関係学部で行なわれたワールド・カフェなどの研修を重ねて12月の CHAmmit の本番を迎えた。今年の CHAmmit は芸術学部で行なわれたこともあり、例年とは少し違い、芸術でしかできない CHAmmit となった。

私がこれまで3年間、すべてスタッフとして CHAmmit に参加してきたが、今年が1番力を発揮することができた CHAmmit であったと思う。しゃべり場などはいつもの CHAmmit だが、懇親会などのイベントは芸術ならではのイベントであったと思う。

私は、この3年間の学生FD CHAmmit を通した学生FD活動を行って、いろいろな仲間との関りができたと思う。さらに、この学生FD活動を通して私の大学生活は充実したものになったと思った。しゃべり場などのこの経験は、今後社会人となっても活かすことができるものになったと思う。これからも各学部において学生FD活動が発展していけるように、現在行われている文理学部や生産工学部をはじめとした学生FD活動はもちろんのこと、その他の学部においてもこの学生FD活動が発展してほしいということを今回の最後のメッセージとしたい。そして、今後もこの学生FD活動に興味を持ってくれる人が増えるように頑張りたいと思う。

4-3 「学生コアスタッフ CHAmmit 2018 を通して」 坂上 亮介

(日本大学国際関係学部国際教養学科4年 CHAmmit 2018 学生コアスタッフ 企画・運営担当)

私の大学生活で4年間継続できた数少ないことのひとつがこのCHAmmitである。クラス担任の教授から誘われて何をやるのかを全く知らずに文理学部に行った1年生。学生スタッフとして参加して、初めて本部の建物に入った2年生。コアスタッフを2年生のころから志願し、仲間もできたが学生スタッフとしての参加になり少し複雑な心境だった3年生。最後の集大成として過去規模、最高のクオリティだと自信をもって言えるものを作れた4年生。CHAmmitは様々な学部、学科、立場の人と触れ合いの場を提供してくれ、私を人間として大きく成長させてくれた。私の大学生活はCHAmmitなしでは語れないと言っても過言ではない。特に最後の芸術学部でのCHAmmit 2018では多くの気づきを得ることができた。

6月23日、日本大学本部の会議室で第1回目の全体ミーティングが行われた。私は就職活動のため、最後にしか参加できなかったが、去年までの顔ぶれと大きく変わった会議室に入った瞬間に期待と不安が同時に沸いたのを今でも覚えている。今年のコアスタッフ、学生スタッフはどんな人たちなのか、自分の役割は何か。この2つを常に模索しながら2回目のミーティング、軽井沢での1泊2日の合宿を過ごした。なかなかまい具合に企画案がまとまらずに雰囲気はどんよりした中でも、きちんと自分の役割を全うできたのかは、今でも不安に思っている。余談ではあるが、夜にみんなで行った懇親会で、教職員の方が見せてくれた笑顔やめったに聞けない話が、心の緊張の糸をほどいてくれたように今は思う。その後は各班に分かれての分担作業であった。芸術学部ならではのオープニングをするのは予想の500倍くらい大変だった。原稿、立ち位置、照明、演出。全てが初めての経験だったために予想以上に時間がかかった。それでも本番の参加者の笑顔や芸術学部の教職員の方から「とても良かったよ。最高だった。」と声をかけてもらった時に、妥協せずに最後までやり遂げてよかったと思った。おそらく私の今後の人生で300人以上を前にダンスをしたり、参加者を煽ってみたり、飛んだり跳ねたりすることはもうないと思う。300人の参加者の前で、芸術学部で司会をできたことをとても誇りに思う。

私は来年から社会人としてまだ見ぬ世界へ飛び込む。きつうまくいかないことや、納得いかないこと、投げ出したいくなることもたくさんあると思う。そんなときはCHAmmitで苦労した経験や仲間たちが私にもう一度頑張るパワーをくれることでしょう。最後になりますが、時にやさしく、時に厳しくして下さった教職員の皆様、先輩なのに全く敬語を使ってくれないコアスタッフ及び学生スタッフのみんなにこの場を借りて感謝申し上げます。

4-4 「学生コアスタッフ CHAmmit 2018 を通して」 長谷川 萌子

(日本大学工学部生命応用化学科4年・CHAmmit 2018 学生コアスタッフ 企画・運営担当)

CHAmmitに携わるのは今回で3回目だ。1回目は当日の参加者、2回目は学生スタッフだった。この2回はどちらも推薦で参加したが、今回はコアスタッフとして自ら参加を希望した。この企画は自分にとってとても魅力的なものであったからだ。

コアスタッフのメンバー8人と初めて会ったとき、とてもわくわくしていた。どんな人がいるのだろう、仲良くなれるかな、いい企画ができるのかなといったように、不安と期待でいっぱいだった。ミーティングが始まってしまうとこんなことを考えている暇もないくらい忙しかった。そのおかげで、他学部ばかりのメンバーはすぐに打ち解け、団結することが出来た。これもCHAmmitの魅力の一つである。

しかし、このような喜びは東の間であった。過去に見たCHAmmitの印象とは全く違ったのだ。みんなで考える楽しいミーティングを想像していたが、実際は、時間に追われながらもゴールの見えない道をひたすら走り続けるようなものであった。特に、8月に行われた合宿では、みんなそれぞれが頭をフル回転させてパサパサの状態になるまで追い込まれていた。

企画が決まると、すぐにオープニングとエンディングのミーティングが始まった。今回の CHAmmiT は芸術学部で開催されるということもあり、様々な専門の先生方をご協力してくださった。クオリティの高いものができるとわかり、胸が高鳴った。しかし、当日までの仕事量とはんでもなく多く、さらに初めての仕事がたくさんあった。全く知らない分野のため手探り状態で何度も何度も作り直した進行表、うまく盛り上がるように構成しなくてはならなかった司会台本、見やすく伝わりやすさを重視したパワーポイント、なかなか会うことができない教職員さん方やほかのコアスタッフとの連携など、本当に目まぐるしい生活が続いた。やめたくなる時もあったが、当日が近づいてくるにつれてどんどん完成していき、自然と楽しみになっていた。司会の準備物が一通り完成すると、司会の練習が待っていた。みんなの前で踊り、話し、時にはアドリブをきかせていく。私の苦手分野だ。司会の相方は国際関係学部で静岡県に住んでいたため、前日のリハーサルまで電話以外で合わせることはできなかった。そんな中、不安しかない状態でリハーサルが始まった。入念に打ち合わせを行っていた学生スタッフはしっかりと仕事を理解していて、本当に助けられた。また、芸術学部の宮澤先生にはたくさんのご指導をいただいた。プロということもあり、舞台はみるみる良いものになっていった。その分、当日の不安や圧力に押しつぶされそうだった。

CHAmmiT 当日、開幕時間が近づくにつれて緊張も高まった。心臓が壊れそうになりながらも、練習やリハーサルでやってきたことをぶつけていった。すごく楽しかった。実際上手くいったのかどうかは、自分ではわからなかったが、たくさんの方から賞賛のお言葉をいただいたため、上手くできたのではないかと考えている。オープニングが終わった後、本企画が待っていたが、その時にはすでに充電切れであったほど全力で取り組んだ。完全燃焼だった。本企画では、新井さんと教室の司会を行った。十分な打ち合わせが最後にできなかったこともあり、焦りと時間に追われたが、優秀なファシリテーター達のおかげで難無く進行することができた。

今回、コアスタッフとしての活動を通して、今までには見えなかった様々な部分を目の当たりにした。たくさん悩んで、考えて、行動した半年間だった。舞台制作の仕事や、大勢の人前でのダンスや茶番司会は人生でたった一回の貴重な経験だと思う。一回りも二回りも成長できたのではないだろうか。また、イベント終了後にスタッフ全員で味わった大きな達成感と感動はきっと忘れないだろう。

CHAmmiT で関わったすべての人に感謝している。これから、大学院に進学し、社会人になり、様々な難題が立ちほだかることと思うが、この経験を糧に乗り越えていきたい。

4-5 「CHAmmiT 2018 を終えて」 西村 美穂

(日本大学芸術学部文芸学科 2 年・CHAmmiT 2018 学生コアスタッフ 資料担当)

今回第 6 回目の日本大学 学生 FD CHAmmiT の企画に携わった。FD という活動を考えるにあたり、根本的に今の日本大学生の学修に対する認識が学生 FD を始めるにあたって足りているのか、という疑問が生まれた。その結果まずは日本大学がどのような方針で学修方針を定めているかなど、「土台の周知」を行うことが先決なのではないかとの結論に至った。既に今までの CHAmmiT では初年次教育など幾つかの大きなテーマを取り扱ってきた。その中でまだ理解の少ない「日本大学教育憲章」及び「日本大学教育憲章ルーブリック」に焦点を定め、その周知を行ったうえで学生からの視点による各学部の特色について話すことで、参加者自身の大学へ通う意義を見直してもらおうという流れを目指した。その後私が携わったのは全体の企画の調整やポスターデザイン、キャッチコピー決め、進行補助のしおり作り等、企画を行うにあたっての物理的な準備だった。今回はコアスタッフという名目で活動していたが、当日の参加者と一番密に関わるのは班にファシリテーターとして進行を務めた学生スタッフだった。企画準備、当日実行としてどちらも重大な役割を担っているのだと認識した。

今回の CHAmmiT を振り返って、日本大学教育憲章は年に 1 度の集まりで消化するには大きすぎるテー

マであったと考える。参加者の中には既に CHAmmiT をただの集まりとして認識し、斜に構えながら聞き流す姿も見られた。日本大学は学部も多く個々の内容も異なる。従って今後の CHAmmiT の議題は、今までのように全体で一つのFD活動を行うよりも、各学部における日頃のFD活動の見直しとするほうがより有意義だと考える。とはいえ、すべての学部で学生FD活動があるわけではない。現段階ですぐに各学部が学生FDを発足するのは物理的に無理があるし、無理に全学部で統一してFDを行えば今の初年次教育の自主創造のように形骸化した取り組みが増えるだけになってしまう。あくまで自主的な発足を促すためにも、今後は CHAmmiT のテーマを各学部のFD活動の方法や検討に持っていく段階に入るのではないだろうか。

約1年間携わり、今までとは違う大学の構造を認識することができた。どの程度の成果を挙げることができたか確たる実感はないが、少なくとも学生スタッフやコアスタッフにとっては、意味のある活動となったことだろう。

4-6 「CHAmmiT との触れ合い、出会いと経験」 磯部 耕志郎

(日本大学危機管理学部危機管理学科3年・CHAmmiT 2018 学生コアスタッフ 企画・運営担当)

CHAmmiT との初めての接点は CHAmmiT 2017 であった。当時は参加者として参加していた。学部の職員からお誘いをいただいた際は、よくわからない状態で「とりあえず」の意識で当日を迎えた。参加をしてみて、なぜ CHAmmiT というものがあるのかがわからなかった。理由としては、当時は1年だったため10月に「自主創造の基礎」の一連でワールド・カフェに参加していたからである。双方の形式は似ていたため、当時は魅力を感じることはなかった。しかし違う点が1つ存在していた。それは学生が運営をしていたことである。それを知った時、感慨深いものを感じた。そこから CHAmmiT に関わりたいと思うようになった。結果として、CHAmmiT 2018 のコアスタッフをやることを決めた。

CHAmmiT 2018 のコアスタッフをやってみて、すごくいい経験ができた。大学をより良くするためにどうしたらいいかを考えると時間はとても有意義なものであった。自分は去年の参加を踏まえて、参加者が来てよかったと思えるような CHAmmiT をやりたいと思った。約半年間準備をしてきた。道のりは予想以上に厳しく、それがわかった時に CHAmmiT 2017 も同じ道を歩んでいると気づき、CHAmmiT の難しさとやりがいを改めて感じた。

CHAmmiT 本番を迎え、結果として自分は大成功だったと思えた。あっという間に一日が過ぎ、終わった瞬間は解放感もあったがとても哀愁を感じた。改めてスタッフをやれてよかったと感じた。

また CHAmmiT で準備をする際の細かい資料作りやプレゼンテーションの仕方など、今後の人生の役に立ちそうな力も育めた。本番でも企画を数百人の前で説明するという大役ができたことは誇りに思える。

以上から、自分は CHAmmiT に出会えたことで、人として大きくなれたと思えた。これもまた、教育理念の「自主創造」であると言えるだろう。これからも CHAmmiT に携わっていくと同時に、CHAmmiT が本校の可能性を引き出す役割を担っていくことを期待する。

4-7 「学生コアスタッフ CHAmmiT 2018 を通して」 田澤 翔生

(日本大学生産工学部応用分子化学科2年・CHAmmiT 2018 学生コアスタッフ 企画・運営担当)

私は、今年度の CHAmmiT で初めてスタッフとして参加させていただき、また初めて「コアスタッフ」という役柄で参加させていただいた。理由としては、昨年度の CHAmmiT に参加した時にイベントを盛り上げる先輩方の姿を見て、1つの事柄に対してチーム一丸となって力を尽くすことがどれだけ素晴らしいことか、それに自分自身も混じって取り組んでみたいと思ったからというのが一つ。また、普段生産工学部での学生FDで学んでいることがこのイベント企画でどれだけ活かすことができるか自分の力を発揮したい、更に自学部の学生FDにとって新しい学習改善方法や学び方などを得られると思ったからである。

いざスタッフになってミーティングに参加した時に周りから意見を求められると、どういう意見を出したらいいかかわからないということが多く、また「ナンバー1のCHAmmiTを作る」という意識もあり何度も自分の力不足を痛感した。更に、イベントの企画をする際にもどのように企画を詰めていったらいいのか、何をしたらいいのかが分からず、企画にご協力いただいた教職員の方々と企画を共にしたコアスタッフの方々には大変迷惑をかけてしまった。それでも、少しでもこのイベントに貢献したいという気持ちは変わらず自分なりの意見を述べることでイベントの企画に喰いついていった。その中で、他のコアスタッフの方々や教職員の方々の考え方を共有し、「学生FDの在り方」を学ぶことができた。特に、ミーティングを重ねることで自分が気付かなかった見方・考え方で述べられた意見や、1人1人にとってのCHAmmiTへの想いというのを聞くことができ、自分も「自分自身にとってのCHAmmiT」というものを意識してこのイベントを作り上げていきたいと思った。そうすると、「ナンバー1のCHAmmiT」よりも「オンリー1のCHAmmiT」を作ることの大切さに気付くことができた。

また、今年度のCHAmmiTで一番嬉しかったことは「マナビルート」というワードがキャッチフレーズとして使われたことである。これは夏合宿の際、個人で考えた企画を発表するときに思い付きで考えた言葉だったのだが、まさか本当に使われることになって驚きもあったがそれ以上に嬉しさを感じた。マナビルートというのは、自分自身の将来についてどんな人になりたいか、何ができるようになりたいかを考えていく上で、今の自分は何をしたらいいのかを考えるルートという意味でこの企画で定めたものである。授業改善や学生生活の改善をするといっても、ただ闇雲にそれについて考えるのではなく、まずゴール設定をしてからそのために自分たちがすべきこと、授業で改善すべきことを考えたほうが何のためにそれをするのが明確になるはずだ。そう考えると、今回の企画で考えたこのマナビルートは、今後自学部の学生FD内でも活かせるキーワードになったのではないかと思う。また、企画で作成した「能力診断チャート」に関して日本大学教育憲章を知ることができた良いきっかけになったと感じた。このように、企画の1つ1つに学生スタッフ全員の想いが込められて最終的に内容の濃い素晴らしいものになった。

改めて、この企画を行う上で企画に携わり協力して下さった日本大学FD推進センターの教職員の方々、芸術学部の教職員の方々、学生一般スタッフの方々、追加ファシリテーターの方々、そしてともにこのイベントを企画した学生コアスタッフの方々には大変お世話になった。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

最後に、このイベントを通してたくさんの経験が得られたし、自分自身の「学生FDの在り方」に対する意識もより一層深まり、自分が見る世界をもっと広げたいと思った。それは、今後自学部の学生FD活動を行っていく中で活動を発展させるためのヒントとなるだろうし、普段滅多に経験できないかけがえのない貴重な経験であったと私は信じている。この経験を踏まえて、これからも学生生活では様々なことに挑戦していきたいし、私自身の「学生FDの在り方」を意識して今後の自学部の学生FD活動に尽力していきたいと思う。

4-8 「CHAmmiTに参加してみて—この活動で何を得られたか—」 新井 せなみ

(日本大学生物資源科学部1年・CHAmmiT 2018 学生コアスタッフ 広報・総務担当)

はじめに

私は、CHAmmiTの開催を目標に年度の半年間を職員と教員、そして学生の三者で企画を立て実行をしてきた。その半年間の経験から何を得たのかを論述していく。

1 夢見た大学と現実

私は、浪人をして希望の大学に入るのを目標に1年間勉強をしてきた。晴れて、日本大学に合格したが、そこで私は大きな目標をなくした。1年間勉強だけをしてきた私は、周りの人との温度差があった。私が夢

に見た大学ではなく、色づいているとは言えない高校の延長線で存在する学校だと思った。そこでは、先生の説明を順々に従うだけの学生と単位を修得する為に興味が無い科目を無理に取ろうとする学生だけだった。その現状を目の当たりにした何も目標がなかった私に、大学を卒業した知人が学生FD団体について話をしてくれた。私は、1年生の時なら時間の余裕があり、一から何かを創ることに高校生活でも浪人生活でも出来なかった事をしたと思い、入学したての1年生で何もわからない状態であるが、コアスタッフとして応募した。これが私のCHAmmiTに加わろうとした動機である。

2 半年間で何を得られたか

1年生でコアスタッフになれたことはいい経験ができたと思っている。今年の抱負は「行動力」だった。大学4年間で動ける時間は限られているから、1年生から何かに挑戦するのは大学生生活のいいスタートだと思った。CHAmmiTに参加して、一からの「コミュニケーション能力」と「分析力」が必要だった。コアスタッフの顔合わせで、この人はどのような分野が長けていて、誰がコミュニケーション能力に長けているのかを見極めるのが大変だった事を覚えている。その次に「情報収集能力」だ。私も含め、初めて一からのスタートで参加したスタッフは昨年どのような事をしたのかの経験の差を埋めるため、経験者のスタッフや知人から聞いてインプットした。夏の合宿では、企画を決める時、企画を生み出す「発想力」が必要であり、それを皆に発表するために資料を作りわかりやすく伝える「説明能力」が問われた。私は、人に説明するのは昔から苦手であり、来年度2年生になってからも、引き続き課題である。広報担当だったので、スタッフに頼み、ポスターの写真撮影や、フライヤーの配布の説明、Twitterのカウントダウン兼スタッフ紹介の説明等、代表の海浮さんに補助をしてもらいながら皆を指示した。他の人に指示したり実行したりする事は、普段することがないので、計画を立てて、誤差も考えて、どのくらいまでにスタッフにやらせるのかを検討した。大変であったがこれからの生活にとって、いい経験ができた。本番では、スタッフに欠席者が出て急遽、しゃべり場③でファシリテーターの役割になった。臨機応変に対応するのは社会に出ていく上で必要であり、大変であった。そのグループが自分の所属する学部でなく、他学部であったことから、共通の話題として話を振る内容が思いつかなかった。それを察知してくれた職員と教員がカバーしてくれた事で、助け合いも必要である事が分かった。

3 感想

以上のことから、1年生で私は色々な経験をできた。これを1年生でできたのは大きいと思う。そして新しい目標もできた。この経験を周りの人にも伝えたいし、まずこの学生FD活動を学部の人に興味を持って欲しいと感じた。参加者の内訳として、3年生が多い気がするので、参加者募集の際には、先生方に1年生、2年生に声をかけてくれるよう相談が必要だと思った。従って、今年度のこのCHAmmiTの経験を活かして、来年度の学部の学生FD活動に力を入れようと思う。

5 参考資料

資料1

主ミの強みは？能力診断チャート

▽ようこそ CHAmiIT2018へ!!
 ここでは主ミが持っているのうりょくを固に書いて見ることが
 できるぞ 各こうもくが3つとも当てはまる→3点 2つ→2点
 1つ→1点 何も当てはまらなかったら0点だ さあ書いてみよう
 ▶点数を書き込む
 グラフを書く
 グループで見せ合う・じまんする

のうりょく	こうもく	てんすう
表面目さ 【かめ】	・講義開始の時間に遅れずに席につく ・シラバスなどをしっかり読んでから講義に臨む ・つい寝てしまったとき罪悪感がある	3
グローバルカ 【たが】	・行きたい国がすぐに挙げられる ・長期休みは海外旅行に行きたい! ・国際ニュースにもアンテナを張っている	3
リーダーシップ 【らいおん】	・グループワークでは積極的に発言することが出来る ・何人かで作業する時、まとめ役になりがちだ ・責任あるポジションにつけることは幸せだと思う	3
行動力 【いのしし】	・講義中積極的に手を上げ、質問することができる ・好きな人には自分からアタックする ・学外の活動と積極的に参加している	3
コミュニケーションカ 【かえる】	・初対面の人とも緊張せずに話ることが出来る ・お年寄りの方と仲良くなるのが得意だ ・自分か話すのも相手の話を聞くのも楽しい!	3
計画力 要領のよさ 【くま】	・課題は前もって終わらせることが多い ・何歳までには結婚して...など、ひそかな人生設計がある ・欲しい物、行きたい場所のためにコツコツ貯金できる	3
探求力・分析力 【かえる】	・成績を日頃から気にしている ・講義の疑問点は、納得できるまで調べたり考えたりする ・専門書を読むことは好きなほうだ	3
創造力・発想力 【やにこーん】	・友達から「おめ上を行くよね～」と言われたりする ・8から何かを創作することが好きだ ・単純作業やルーティンワークよりも新しいことがしたい	3

～グラフの書き方～
 ①のうりょくごとの点数に印をつける
 ②点と点を直線で結ぶ

▽自分の得意なこと、ちょっと苦手なこと、整理できたかな?
 結果をまとめてみよう!!
 ▶23ページへ

資料2

～マナビルート～

▽よくぞここまでたどりついた
 ここからは主ミ自身の将来について考えてみよう どんな人になりたいか
 何ができるようにになりたいか なんでもいい その目標に向かってどう
 進めばいいのかわ、具体的にイメージしてみよう!!
 考える
 話し合う
 ▶かきこむ

もくひょう

レベル3

レベル2

レベル1

スタート：いまのじぶん ▶19Pの結果をここに書き込もう!
 ex) ○○はちょっと苦手だけど、○○と○は得意

資料3

～しゃべり場①セーブポイント～

▽みんなが出してくれた意見を整理して、次のしゃべり場に
 持っていくようにまとめよう!
 ▶のうりょくを書き出す
 しょうさいをメモする

〈のうりょく〉

〈しょうさい〉

資料4

学生からみた8つの能力

	能力	つまりこういうことも	こんな理由(背景)のせいかも	学生生活でこの能力を伸ばすには？	その他の場面では？
自ら学ぶ	A-1: 豊かな知識・教養に基づく高い倫理観	・教養を持ち、既存概念に囚われない視点を持つことができる ・教養に基づいた倫理観を持ち、人間としてあたりまえの行動ができる ・社会的少数者にまつわる問題に対して、正しい見識を持っている	不確実な現代の中、多種多様な人と協力して生きていかなければならないため <キーワード> 変化する生き方、謝れない人、罪を認めない人、多様な価値観、LGBT、発達障害		
	A-2: 世界の現状を理解し、説明する力	世界諸国の歴史や政治、経済、文化、価値観、信条などの現状を理解し、国際社会が直面している問題について考えることができる	グローバル化進み、自分が働く職場には、多くの外国人がいるかもしれないため <キーワード> 少子高齢化、キリスト教、イスラム教、英語		
自ら考える	A-3: 論理的・批判的思考力	情報を客観的に判断し、自分の考えを整理することができる	情報過多の時代に真実を見極める力が必要であるため <キーワード> SNSの発達、差別、偏見、ヘイトクライム		
	A-4: 問題発見・解決力	自分で問いを立て、自分なりの答えで問題を解決できる	確かな答えがない現代において、自分なりの答えを導き出すことが必要であるため <キーワード> 終身雇用の崩壊、AIの登場、世界各地での紛争		
自主創造	A-5: 挑戦力	責任を持ち、新しいことに果敢に挑戦することができる	自分が満足できる将来を切り開くには、目の前のことをこなすだけでなく、新しいことに触れることも必要であるため <キーワード> キャリアの多様化、実力主義、グローバル化		
	A-6: コミュニケーション力	様々な人々とのコミュニケーション(伝える、聴く、共感する、想像する)を通じて、信頼関係を築くことができる	コミュニケーションは人間関係の基本であり、社会に出るからも重要視されるため <キーワード> 伝える、聴く、共感する、想像する、質問する、ユーモア		
	A-7: リーダーシップ・協働力	・リーダーシップを発揮し、より良い成果を上げるため、他者の力を引き出すことができる ・集団の活動において、他者と協力し、作業を行える	集団での自分の役割をみつけ、チームの成果に貢献する力が大事であるため <キーワード> 会社、チームでの共同作業、サークル、ゼミ		
	A-8: 省察力	やっておわりの状態にせず、継続的に自分自身を振り返り、今後に生かすことができる	自身の問題を解決するには、過去に行ってきたことを振り返る必要があるため <キーワード> 自分で考えることが学生生活でできることに繋がります		
学部で伸ばせる力	例) 継続力				

資料5

～しゃべり場@メモ広場～

▽ここではしゃべり場@で話し合ったのうりよくを必要だと思ふ順にランクづけするようた
▶かきこむ

	のうりよく	しょうさい
1位		
2位		
3位		
4位		
5位		

資料6

8つの能力とできること

能力	8つの能力とできること	
	学生生活でこの能力を伸ばすには？	その他の場面では？
自ら学ぶ	A-1 専攻の知識と実用に関する深い理解	
	A-2 世界の現状を把握し、説明する力	
自ら考える	A-3 論理的・批評的思考力	
	A-4 問題発見・解決力	
自主創造	A-5 読解力	
	A-6 コミュニケーション力	
	A-7 リーダーシップ発揮力	
	A-8 実習力	
卒業で伸ばせる力		